ビロウ樹生い茂る青島の神域へ

写真家・芥川仁さんと歩く青島植物観察会 (2012.9.9)

いざ青島へ！

「いざ青島へ！」とは言っても、今回は足下の青島が観察会の舞台。いつもと違って午後３時スタート、約２時間が午後の部。夜の部が午後７時から。参加者は昼・夜で３４名。

行ってみるべし青島植物園

青島駅スタート、青島植物園を抜けることにした。クワズイモに目が止まる。毒があって食すべからず、「食わず芋」だ。大きな木にピンクの花が咲いているのがみんなの目に入った。日本ではあまり目にしないアルゼンチンの花木だ。名前はパラボラッチョ、酔っ払いの木なのだそうだ。５枚の花びらが大きくついている。しばし見とれていたら大きな花がひとつ舞い降りてきた。

ハマウド見てみるべし

植物園を抜け、波状岩（鬼の洗濯板）の成り立ちなど聞きながら、青島着。すぐにヨシに似たダンチク（暖竹）が目に入る。青島の南側から東に勢いを伸ばしている。これが島の周りを取り込んだらどうなるだろうと心配する。が、もしそういうことがあってもずっと将来のことだ、で一見落着。

次は南九州以南というキダチハマグルマ。一見弱そうだけど繁殖力が強いそうだ。一面の緑にタンポポに似た黄色い花がきれいだ。大鳥居をくぐり青島神社入り口をすぎると、波状岩に断層らしきものがあるのを発見。どうも島中心部に向かっていて気に留めておく必要がありそうだ。海岸にはハマゴウが群生。時期はすぎていたが、部分的に紫色の可憐な花が残っていた。宮崎の海岸ではよく見る風景だが、やはり浜を代表する植物だ。

そしてすぐそばに、時期は過ぎ枯れ枝となり背伸びしたハマウドがポツリ、一人寂しげだ。何かに似ていると思ったら、アシタバそっくりだ。ハマウドは、「浜独活」「鬼独活」とも言われ食べられない。山に行けばウドがあり食べられ、野にはアシタバということになるのだろうか。アシタバは明日葉と書き、もちろん食べられる。折ると黄色の汁が出る。折りとってもすぐに新しい葉を付けるから明日葉と名がついたといわれるほど、生育旺盛だ。青島周辺ではお茶やアイスクリーム等に商品化されている。

ハマウドは折れば黄白色の汁のようだ。こちらも負けず劣らず生育旺盛とみたが、枯れ幹・花となっている今は想像してみるだけだ。　ゆっくりと青島を半周した。いわゆる砂は無い。砂と思しきは全部貝殻だ。貝殻が波で寄せられ風で寄せられ、砂地（貝地）を形作っている。太平洋に面した東側は、島の中心部に向かって、

波状岩 --- 砂地（貝地）--- 草地 --- 照葉樹 --- ビロウ林と続く。自然の姿だ。

青島の中はビロウの密林

さてこれからが今日のメインイベント、普段は入ることはできない島内観察だ。許可を得て入ることができた。遊歩道から一歩中に入れば途端にそこは別世界、ビロウ密林と呼ぶべきところだった。日は射し込まず、浜風も届かないため、湿度たっぷり、地面はビロウの落ち葉が朽ちて積み重なりふかふかブカブカ。あちこちにキノコ類が見えた。予想もしなかったビロウ密林の中を案内者の後を追って歩く姿は、まるでジャングルを行く一行に見えた。映画ならここでサルが叫びニシキヘビなどが待ち受けたりするところだが、ここではそれは無い。

今回は長袖シャツ・長靴といういでたちだったが、幸い何事もなかった。背高いビロウに混じって若いビロウも見られた。次代のビロウたちだ。朽ち果てる葉っぱと青々とした葉っぱを広げる若いビロウ。ゆっくりと時間が流れているのだろう。タブも大木ではないが幾本かあった。海からの風をうけるためか、どのタブも斜めに立っていた。ビロウ林の上に伸びれば、風に痛めつけられるのであろう、そのため幹を斜めに倒し背を低くしているとみた。大木がないのは、土層の脆弱さによるもののようだ。

ビロウ林を歩き疲れてそろそろ終わりの時間が近づいてきた。ビロウ林から遊歩道に近づくにつれ明るくなり、海が垣間見え、心地よい海風を感じた。夕方の５時近くだ。遊歩道に出て歩を進めると、そこにはいつも観光写真や青島名物『宇いろう』の絵で見ていた砂地のビロウ林だった。密林的ビロウ林を見た後のビロウ林は、少し歳をとった乾燥肌のビロウ林に見えた。もう人影が長くなる時間帯になり、晩夏から初秋の残光が青島の海にまぶしかった。

青島の暗闇を体験

さて、夜は新たな参加者も加わり暗闇の青島体験。マムシが出るという本宮様への道をはらはらしながら摺り足状態で進み、本宮様の前で真っ暗闇を体験。時間が経つにつれ生来の眼をとりもどしていくのか天と木と地を見分けられるようになり、あちこちに光る小生物も感じ、体験の目的のひとつでもある青島という小さな宇宙を感じることになった。

木々の隙間をぬって見える空には、雲が薄くかかったはいたが時折星が瞬いた。本宮様前での体験を終えて足下を薄いライトに照らされて歩くと、なんと光のありがたいことか。こんなところを歩いたのかと足が早くなる。潮騒に近づくにつれ、風のない生温い感覚から解放された体は、心地よい海風を体いっぱい吸い込んでいるようだった。